

VTRによる振り返りを用いた模擬授業の受容について

— 体育系教育法講義での実践を通して —

加藤 純 一

要旨：筆者は、体育系教育法講義（ここでは「保健体育科教育法」と「児童体育」を指す）において模擬授業の様子をビデオカメラで撮影し、その後それを視聴する時間を設けて振り返りを行うという形態の授業設計をした。所謂VTRを用いた模擬授業の省察である。この手法の効果については先行研究が示すところであるが、実際にこの方法を用いて講義を行うとすると、模擬授業の実施回数や指導回数の減少など、種々の制限が生じることが予測されている。今回、これらの諸課題を踏まえた上でシラバスを作成、講義途中において形成的評価の一環として当該講義の実施形態に関するアンケート調査を実施し、その後の授業運営のための示教を得ることとした。本稿はその調査結果を分析したものである。結果、VTRを用いた振り返りには肯定的であるが、この手法を用いることによって生じる先のような制限に関しては否定的な側面を見せた。

キーワード：VTR 模擬授業 振り返り 授業設計

1. はじめに

文部科学省の「教職課程コアカリキュラムの在り方に関する検討会」は、平成29年11月に「教職課程コアカリキュラム」をまとめている。大学が教職課程を編成するに当たり参考とする指針（教職課程コアカリキュラム）を作成することで、教員の養成、研修を通じた教員養成における全国的な水準の確保を行なっていくとし、全国の大学の教職課程で共通的に修得すべき資質能力を示した。各大学が責任を持って教員養成に取り組み、教師を育成する仕組みを構築することで教職課程全体の質保証を目指すものであるとしている。

この「教職課程コアカリキュラム」の中の「教科及び教科の指導法に関する科目」には、「各教科の指導法」として「全体目標」「一般目標」「到達目標」が掲げられている。この場合の「全体目標」とは当該事項を履修することによって学生が修得する資質能力を表したものであり、「一般目標」とは全体目標を内容のまとまり毎に分化させて表したもので、「到達目標」とは学生が一般目標に到達するために達成すべき個々の基準を表したものである。「各教科の指導法」として「全体目

標」には次のようにある。長くなるがそのまま引用する。

当該教科における教育目標、育成を目指す資質・能力を理解し、学習指導要領に示された当該教科の学習内容について背景となる学問領域と関連させて理解を深めるとともに、様々な学習指導理論を踏まえて具体的な授業場面を想定した授業設計を行う方法を身に付ける。（下線筆者）

この「全体目標」を受けて、各教科の指導法は「当該教科の目標及び内容」と「当該教科の指導方法と授業設計」に分けられる。後者の「当該教科の指導方法と授業設計」に目を向けると、その「一般目標」には「基礎的な学習指導理論を理解し、具体的な授業場面を想定した授業設計を行う方法を身に付ける」（下線筆者）とあり、「到達目標」については以下のようにある。長くなるがそのまま引用する。なお、ここでの下線も筆者による。

- 1) 子供の認識・思考、学力等の実態を視野に入れた授業設計の重要性を理解している。

- 2) 当該教科の特性に応じた情報機器及び教材の効果的な活用法を理解し、授業設計に活用することができる。
- 3) 学習指導案の構成を理解し、具体的な授業を想定した授業設計と学習指導案を作成することができる。
- 4) 模擬授業の実施とその振り返りを通して、授業改善の視点を身に付ける。
- 5) 当該教科における実践研究の動向を知り、授業設計の向上に取り組むことができる。

筆者がここで関心を示すのが模擬授業である。指導力や実践力、洞察力などを養うことを目的としており、実際の授業に準じた実践的形態を取り入れて授業を構成していくことから模擬授業と呼ばれる。この「教職課程コアカリキュラム」は、模擬授業の前段階に授業設計を置き、続いて「具体的な授業場面を想定した授業設計」を行う方法を身に付けること、「授業設計の重要性の理解」、「教材などの効果的な活用法を理解した授業設計での活用」、「具体的な授業を想定した授業設計(学習指導案の作成)」を経て、「模擬授業の実施とその振り返りを通して、授業改善の視点を身に付ける」ことに至る過程として読み取ることができる。つまり、模擬授業を「現場で行われているような授業を模擬的な環境下ですること」と理解するのは狭義の解釈であり、授業設計を通して模擬授業とは授業改善の視点を身に付けることと理解すべきであろう。

しかし一方で、この「授業設計」に時間を掛けると、児童・生徒を想定した模擬的な環境下での実践的な修学、つまり模擬的な授業に掛ける時間が減じられてしまうことも事実である。小松崎(2010)は「模擬授業の意義と効果的な進め方」の中で、「座学の講義だけでは保障することが難しい授業実践に直結する具体的事項について、実際の行為を通して学び身につけることがめざされる。実際の児童生徒と大人が務める生徒役との違いという限界を差し引いても、十分に余りある教師教育の方法である」(263頁)と述べている。特に筆者の専門領域である体育科教育においては、

教室での座学を実践の形に如何に落とし込めるかが問われところでもある。教師役として、体育館やグラウンドといった空間の中で児童生徒役の学生を如何にコントロールしていくかということは、机上での学習体験とは異なる形の学びを得ることもなる。ここにまた、ジレンマがあることも事実である。

さて、今回筆者が注目したのは、まさに先の「当該教科の指導方法と授業設計」に掲げられる「到達目標」にある「模擬授業の実施とその振り返りを通して、授業改善の視点を身に付ける」である。模擬授業を実施した後の「振り返り」を行うことによる授業改善の視点は、多くの教科教育担当教員が関心を抱いているところである。また、各教員がそれぞれ独自の教授法を確立し、学生を導いているところでもある。そのような中で、筆者が独自の形態で実践しているのがVTRを用いた模擬授業の振り返りである。後述のように、この授業方法は万全ではなく、種々の課題を包摂しながら行わざるを得ないことは事実である。しかし、授業を改善するための多くの視点を受講学生や講義担当者に提供してくれることも事実である。

そこで本稿では、筆者が実践してVTRによる振り返りを導入した講義形態を、受講学生がどのように受容したかについて述べることにする。

2. 模擬授業に関する先行研究

模擬授業に関しては多くの研究成果を見ることができる。ここでは、先行研究をまとめている4つの論文からその動向を紹介し、後段では、筆者が今回取り上げたVTRに関する論文を紹介することにする。

【模擬授業に関する研究】

(1) 落合賀津子(2017)から

- 1) 実践的指導力向上を目的とした模擬授業を取り入れた授業の有効性を報告
 - ・木原成一郎, 他(2007)
 - ・福ヶ迫善彦, 他(2007)
 - ・徳永隆治(2009)
 - ・宮尾夏姫, 他(2014)

- 2) ビデオ記録が教授者の自己モデリングの手段となり、大学の授業への主体的な参加を促す要因となる
 - ・伊藤秀子 (2004)
 - (2) 山崎将幸 (2018) から
 - 1) 大学の教員養成課程において行われた各教科の模擬授業に関する研究成果の報告
 - ・藤田育郎, 他 (2011)
 - ・松本奈緒 (2015)
 - 2) 体育の模擬授業を行うことの成果や効果としてのインストラクションやマネジメントと言った基礎的な教授技術の獲得について
 - ・長谷川悦示 (2003)
 - ・岡出美則, 他 (2006)
 - 3) 体育の模擬授業を行うことの成果や効果としての体育授業の評価の認識
 - ・深見英一郎 (2005)
 - 4) 体育の模擬授業を行うことの成果や効果としての良い体育授業の基礎的条件についての認識
 - ・日野克博 (2004)
 - 5) 体育の模擬授業を行うことの成果や効果としての学習者に注意を向けた観察
 - ・藤田育郎, 他 (2009)
 - 6) 体育の模擬授業を行うことの成果や効果としての子供への教師の働きかけの把握と資質向上のための省察という方略の効果の認識
 - ・前掲, 木原成一郎, 他 (2007)
 - (3) 高橋純, 他 (2018) より
 - 1) 模擬授業指導用 SNS を用いた模擬授業の報告
 - ・秋吉博之 (2017)
 - 2) マイクロティーチングのビデオ撮影と LMS を用いたビデオの閲覧とコメント活動
 - ・松野浩平, 他 (2011)
 - (4) 長嶺健, 他 (2019) より
 - 1) 体育の模擬授業でのインストラクションやマネジメントといった基礎的な教授技術の獲得
 - ・前掲, 長谷川悦示 (2003)
 - 2) 体育の模擬授業による基礎的条件である「授業の勢い」「授業の肯定的雰囲気」についての認識の向上
 - ・前掲, 日野克博 (2004)
 - 3) 模擬授業による「体育授業を科学的に分析すること」や「多様な視点から体育授業を評価すること」の意義の認識
 - ・前掲, 深見英一郎 (2005)
 - 4) 模擬授業による『『子供の学習』を組織する教師の働きかけ』の把握
 - ・前掲, 木原成一郎, 他 (2007)
 - 5) 小集団 (6~7名) による模擬授業での観察のポイントの獲得の可能性について
 - ・吉野聡 (2004)
 - 6) 同一者の2時間連続の模擬授業による1回目の課題点の2回目での改善について
 - ・村井潤, 他 (2009)
 - 7) 指導役を経験しない学生の教師の視点での授業の省察について
 - ・前掲, 宮尾夏姫, 他 (2014)
 - 8) 模擬授業の進行につれての授業者と被授業者の生徒側の視点から省察傾向について
 - ・内田雄三 (2013)
- 【模擬授業において VTR を用いた研究】**
- 1) ビデオカメラで撮影した全体映像と教員の目線カメラの映像を合成した映像を作成し、翌週に全員で省察会を行い、その気づきをリフレクションノートに記載させる
 - ・前掲, 山崎 (2018)
 - 2) 汎用の SNS やスマートフォンのビデオ撮影機能を活用して、模擬授業ビデオやコメントを投稿し、振り返りを行なった
 - ・前掲, 高橋 (2018)
 - 3) 模擬授業を録画したビデオ視聴を基にした授業力自己診断シートの記述内容を分析、授業実践力の向上に効果的な授業方法を検討
 - ・前掲, 落合 (2017)
 - 4) 授業者の内省を促すためのタブレットによる模擬授業の撮影し全体での振り返り活動後に授業者のタブレットやスマホに映像を送付
 - ・喜多容子 (2020)

3. 調査対象

筆者が担当した「保健体育科教育法Ⅱ」および「児童体育」の受講生（第5回出席者「保健体育科教育法Ⅱ」44名・「児童体育」22名の66名、第8回出席者「保健体育科教育法Ⅱ」43名・「児童体育」18名の61名）。

4. 講義内容

「保健体育科教育法Ⅱ」並びに「児童体育」の講義内容は以下の通りである。

（1）「保健体育科教育法Ⅱ」・「児童体育」共通

全15回の講義のうち、模擬授業は8回実施。各回では2組が模擬授業を実施（例えば「保健体育科教育法Ⅱ」の第7回「指導法7 剣道・柔道」では、剣道と柔道の模擬授業が行われた）、各組で協力して模擬授業の準備をし、実施する。1組の時間は23分（ブリーフィング3分・模擬授業20分）とし、本時案は割り振られた運動領域（あるいは種目）の中から各組で自由に設定させた。模擬授業の場はグラウンド、メインアリーナ（バスケットコート2面分）、サブアリーナ（バスケットコート1面分）、柔道場で、種目によって選択させた。各回、模擬授業開始前に単元計画、単元目標、本時の流れについてブリーフィングをさせている。また、模擬授業終了後に当該の模擬授業の評価カードを記入させ（3分間）、講義担当者（筆者）のリードで、模擬授業の振り返りを行なった。次頁の表1・2のように、2回模擬授業を実施後に教室において後述のようなVTR（4回分の模擬授業）による振り返りを行なった。なお、受講生の模擬授業の省察を促すため、単元計画、提出された学習指導案、模擬授業終了後の協議会での発言などを基にした「振り返り用の資料」を講義担当者（筆者）が作成、模擬授業終了後の翌々日までに「manaba」にアップし配信した（閲覧期間は次の模擬授業実施日前の23時55分まで）。また、受講生には当日の模擬授業の種目に関する予習と、模擬授業当日の振り返り（協議会）での発言等の記録、さらには後日配信される「振り返り

用の資料」などを基にした復習をさせ、それぞれをノートにまとめさせている。第15回講義終了時に回収、担当教員が目を通し、後日に返却する。

（2）「保健体育科教育法Ⅱ」

中学校・高等学校の保健体育科の教員免許取得を目指す大学2年生対象（受講者数は再履修生を含む58名）の必修の講義。春学期に「保健体育科教育法Ⅰ」を履修（講義目標：保健体育の領域の目標と内容について理解し、体育の運動領域ならびに保健の内容に精通する。保健の授業のマネジメントの仕方、インストラクションの仕方について理解を深める）、秋学期に「保健体育科教育法Ⅱ」を履修。講義目標は「保健体育科における目標と内容を理解し、授業の展開の仕方（インストラクション技術）について理解を深める。保健体育の授業のマネジメントの仕方、インストラクションの仕方について模擬授業を通して実践する力を身につける」となっている。主な授業内容は表1の通りである。なお、指導法1～8において模擬授業を実施、1組は4～5名で構成されている。

（3）「児童体育」

小学校教員免許取得を目指す大学3年生対象（受講者数は23名）の必修の講義（令和3年度から選択科目）。本学の教育学科では春・秋に計7コマを開講、クラス分けは教務支援課が行う。筆者担当の「児童体育」の講義目標は「小学校学習指導要領の目標ならびに内容を理解し、学校教育で育む資質・能力を育む3つの柱に従った授業展開を理解する。そのような授業展開ができるためのマネジメント方略、インストラクション技術について精通する。以上の点を踏まえた模擬授業を展開する力を身につける」となっている。主な授業内容は表2の通りである。なお、模擬授業1～8において模擬授業を実施、1組は1～2名で構成されている。

5. 調査内容

「保健体育科教育法Ⅱ」並びに「児童体育」受講生が、VTRを用いた模擬授業の振り返りをど

表1 保健体育科教育法の授業内容

1	オリエンテーション
2	模擬授業をするに際しての注意事項・模擬授業の展開の仕方・生徒役の立場・評価カードの書き方
3	指導法1 ソフトボール・長距離走（ディスカッション・フィールドワーク）
4	指導法2 ハードル走・鉄棒運動（ディスカッション・フィールドワーク）
5	振り返り① 指導法1・2の内容について振り返り（ディスカッション）
6	指導法3 ソフトバレーボール・バドミントン（ディスカッション・フィールドワーク）
7	指導法4 バスケットボール・タグラグビー（ディスカッション・フィールドワーク）
8	振り返り② 指導法3・4の内容について振り返り・アンケート記入（ディスカッション）
9	指導法5 体づくり運動・ダンス（ディスカッション・フィールドワーク）
10	指導法6 マット運動・跳び箱運動（ディスカッション・フィールドワーク）
11	振り返り③ 指導法5・6の内容について振り返り・アンケート記入（ディスカッション）
12	指導法7 剣道・柔道（ディスカッション・フィールドワーク）
13	指導法8 体育理論・保健（ディスカッション・フィールドワーク）
14	振り返り④ 指導法7・8の内容について振り返りを行う（ディスカッション）
15	本講義のまとめ 第1回～第14回までの振り返り・アンケート記入（ディスカッション）

表2 児童体育の授業内容

1	オリエンテーション
2	模擬授業をするに際しての注意事項・模擬授業の展開の仕方・児童役の立場・評価カードの書き方
3	模擬授業1 ボール運動（ベースボール型）；ゴロの捕球と送球・バッティングと走塁（ディスカッション・フィールドワーク）
4	模擬授業2 器械運動（鉄棒運動）；ぶら下がり、支持姿勢、回転・技の組み立て（ディスカッション・フィールドワーク）
5	振り返り① 模擬授業1・2の内容について振り返り（ディスカッション）
6	模擬授業3 ボール運動（ネット型）；ドッチボール各種・プレルボール（ディスカッション・フィールドワーク）
7	模擬授業4 ゴール型；ポートボール・タグラグビー（ディスカッション・フィールドワーク）
8	振り返り② 模擬授業3・4の内容について振り返り・アンケート記入（ディスカッション）
9	模擬授業5 表現運動；リズムに乗る・ジャングル体験（ディスカッション・フィールドワーク）
10	模擬授業6 器械運動（マット運動）；技と技をつなぐ（跳び箱運動）；台上前転（ディスカッション・フィールドワーク）
11	振り返り③ 模擬授業5・6の内容について振り返り・アンケート記入（ディスカッション）
12	模擬授業7 陸上運動；（ハードル走）；インターバル（リレー）；バトンパス（ディスカッション・フィールドワーク）
13	模擬授業8 体づくり運動；体ほぐしの運動・体の動きを高める運動（ディスカッション・フィールドワーク）
14	振り返り④ 模擬授業7・8の内容について振り返り（ディスカッション）
15	本講義のまとめ 第1回から第14回までの振り返り・アンケート記入（ディスカッション）

のように受け止めているかを把握するために、質問紙法による調査を2回実施した。1回目では今回初めて実施したVTRによる模擬授業の振り返りの受け止め方について、2回目では模擬授業を

担当しなかった者（脇役者）並びに児童生徒役の学生の視点に注目したVTRによる振り返りの受け止め方について調査を行なった。なお、1回目の調査用紙には自由記述欄を設けた。

6. 結果

以下に分析の結果を示す。

(I) 1回目調査から

1回目の調査は形成的評価の一環として第5回目のVTRによる省察の際に実施した(対象は「保健体育科教育法Ⅱ」44名,「児童体育」22名)。

1) VTRを用いた模擬授業の振り返りを行うことについて

VTRによる省察は、15回の講義のうち4回実施した。経緯について少々説明をしておく。当初、この省察は3回に抑える予定でいた。これにより、体育館等で行われる模擬授業の回数が1回増え、指導を経験する者も増えることになる。しかし一方で、教室で行われる省察では3講義分のVTR(模擬授業では6授業分)を視聴することになる。1回のVTRによる振り返りは、視聴と協議する時間を合わせて15分以内となり、90分の大学講義時間内でこの時間設定で省察を行うことは実質的な効果が上がらないと判断した。そこで、「模擬授業1」が始まる直前に全体構成を見直し、今回は模擬授業を8回、VTRによる省察を4回という設定に修正した。

さて、VTRによる省察の試みは今回が初めてある。この試みについて学生の反応はどうであったか。1コマ分を割いてのVTRによる振り返り(省察)の適否について問うた結果が表3である。また、VTRの視聴の意義について問うた結果が表4である。模擬授業の振り返りを行う際の手段として、VTRによる省察が必要であるとする者は「とても必要である」「必要である」を合わせて97%にのぼる。また、VTRを見ることでの省察の意義についても、同様に97%の者がそれを認めている。

表3 VTRによる省察の必要性

とても必要である	35	53.0%
必要である	29	43.9%
あまり必要でない	2	3.0%
全く必要ない	0	0.0%

表4 VTRを見ることの意義

とても有意義である	32	48.5%
有意義である	32	48.5%
あまり有意義でない	2	3.0%
全く有意義でない	0	0.0%

なお、「児童体育」の受講生並びに「保健体育科教育法2」の再履修生は、2年次においてVTRによる省察を用いない模擬授業を経験している(全員が筆者の講義を受講)。そこで、VTRを用いない模擬授業と比較の結果を表5に、また、VTRによる振り返りを導入するに際して種々の制限(模擬授業の回数減や1回の模擬授業の担当者の増加など)に対しては表6の通りである。VTRを用いない振り返りで実施していた模擬授業との比較では、78.3%がVTRによる振り返りが良いとしているが、21.7%は「どちらとも言えない」としている。また、VTRによる振り返りを導入する際の種々の制限が加わることについては「仕方がない」が52.2%であるが、一方で「制限は好ましくない」「どちらとも言えない」は、47.8%と拮抗している。

表5 VTRなしの模擬授業との比較

VTRありが良い	18	78.3%
VTRなしが良い	0	0.0%
どちらとも言えない	5	21.7%

表6 VTR導入に伴う制限について

制限は仕方がない	12	52.2%
制限は好ましくない	1	4.3%
どちらとも言えない	10	43.5%

2) VTRを用いた自身の振り返りについて

1回目の調査までに模擬授業を担当した受講生に対し、自身のVTRを見ることに意味を感じるかを問うた結果が表7である。また、自身のVTRを見て得るものの有無を問うた結果が表8である。指導者役担当者の全員が、自らの振り返りを行う際にVTRを見ることは意味があるとしており、96.8%の者がVTRの視聴から何らかの得るものがあったと回答している。

表7 指導役の自身のVTRを見ることに対して

とても意味がある	19	61.3%
意味がある	12	38.7%
あまり意味はない	0	0.0%
全く意味はない	0	0.0%

表8 指導役自身のVTRから得るものの有無

とてもあった	15	48.4%
あった	15	48.4%
あまりなかった	1	3.2%
全くなかった	0	0.0%

3) 児童・生徒役の立場

模擬授業は、児童・生徒役を演じる受講生がいて成り立つ部分もある。児童・生徒役を演じる受講生が自身の姿を見て学ぶことがあったかを問うた結果が表9である。VTR視聴から学びが「とてもあった」「あった」は75.8%、一方、「あまりなかった」「なかった」は24.2%となった。

表9 児童・生徒役自身がVTRを見て学があったか

とてもあった	17	25.8%
あった	33	50.0%
あまりなかった	15	22.7%
全くなかった	1	1.5%

(Ⅱ) 2回目調査から

2回目の調査は、模擬授業12回を終えたところで実施した(対象は「保健体育科教育法Ⅱ」43名、「児童体育」18名)。

(1) 模擬授業終了後に実施の振り返りについて

模擬授業の振り返りは、このVTRによる振り返りの他に当日の模擬授業終了後にも実施している(約10分)。このことを踏まえた上で、模擬授業当日とVTRによる振り返りを比較させた結果が表10である。VTRによる省察よりも模擬授業終了時に行う振り返りを充実させるべきであるとする者は「とてもそう思う」「思う」が55.7%、「あまり思わない」「全く思わない」は42.6%となった。

表10 模擬授業終了後の振り返りを充実させる

とてもそう思う	16	26.2%
思う	18	29.5%
あまり思わない	25	41.0%
全く思わない	1	1.6%
無回答	1	1.6%

(2) VTRの編集について

VTRでの省察を行うためには、20分間の模擬授業を受講生が見やすいように編集する必要が生じた。前述のように、今回は10分程度のダイジェスト版になるように筆者が編集した。この編集に関して問うた結果が表11~12である。およそ10分という時間に編集したことに対して「納得する」とした者が96.7%、「もっと長い方が良い」は1.6%、短い方が良いとするものはいなかった。また、編集されたVTRに見たいシーンがあったかとの質問に対しては、「あった」が68.9%、「なかった」が1.6%、「何とも言えない」が24.6%であった。

表11 VTRを10分程度に編集していることに関して

納得する	59	96.7%
もっと長い方が良い	1	1.6%
もっと短い方が良い	0	0.0%
無回答	1	1.6%

表12 VTRを見たいシーンがあったか

あった	42	68.9%
なかった	1	1.6%
何とも言えない	15	24.6%
無回答	3	4.9%

(3) 模擬授業において指導者役を担当した者の意識

表13~16は、模擬授業において指導者役(教師役)を担当した者が、VTRを見た際に意識した点に関しての結果である。回答者は30名である(1回の模擬授業の中で複数の学生が指導役を担当している場合がある)。声の大きさをチェックした者は76.9%。話すスピードをチェックした者は83.3%。説明・発問・指示の仕方をチェックし

た者は93.3%，言葉の選択の仕方をチェックした者は86.7%となった。

表13 自身の声の大きさ

チェックした	23	76.7%
チェックしていない	4	13.3%
どちらとも言えない	2	6.7%
無回答	1	3.3%

表14 自身の話すスピード

チェックした	25	83.3%
チェックしていない	3	10.0%
どちらとも言えない	1	3.3%
無回答	1	3.3%

表15 自身の説明・発問・指示の仕方

チェックした	28	93.3%
チェックしていない	0	0.0%
どちらとも言えない	1	3.3%
無回答	1	3.3%

表16 自身の言葉の選択の仕方

チェックした	26	86.7%
チェックしていない	1	3.3%
どちらとも言えない	2	6.7%
無回答	1	3.3%

(4) VTR で他の指導者の姿を見て

筆者の講義では模擬授業は16回行われた。この内、自身の担当は1回のみで、残りの15回は他者の模擬授業を児童・生徒役で参加することになる。VTRによる振り返りも同様で、15回は他者の模擬授業を視聴することになる。このことを踏まえ、他の学生の模擬授業を見ることについて問うたものが表17である。他者の模擬授業の様子を視聴して自身のためになるかとの問いに「とても思う」「思う」と肯定的回答した者が96.7%，否定的な「あまりそう思わない」と回答した者が1.6%であった。

表17 他者の模擬授業の視聴は自身の勉強になる

とても思う	41	67.2%
思う	18	29.5%
あまり思わない	1	1.6%
全く思わない	0	0.0%
無回答	1	1.6%

また、VTRに映る他の指導者の姿を視聴した際の意識に関する結果を表したものが表17～20である。他の指導者の声の大きさをチェックした者は91.8%，話すスピードをチェックした者は77.0%，説明・発問・指示の仕方をチェックした者は98.4%，言葉の選択の仕方をチェックした者は86.9%であった。

表18 他の指導者の声の大きさ

チェックした	56	91.8%
チェックしていない	4	6.6%
どちらとも言えない	1	1.6%

表19 他の指導者の話すスピード

チェックした	47	77.0%
チェックしていない	10	16.4%
どちらとも言えない	4	6.6%

表20 他の指導者の説明・発問・指示の仕方

チェックした	60	98.4%
チェックしていない	0	0.0%
どちらとも言えない	1	1.6%

表21 他の指導者の言葉の選択の仕方

チェックした	53	86.9%
チェックしていない	4	6.6%
どちらとも言えない	4	6.6%

7. 考察

VTRによる振り返りを行うに際の課題の1つに、録画したVTRの編集の仕方がある。誰がどのような目的で編集するかにより、内容が変わるからである。本講義で用いたVTRは、20分の模

擬授業をおよそ10分に編集したが、その編集された時間に対して受講生は概ね納得していた(表11参照)。時間が許すのであれば全てを視聴した上で振り返りをすべきであろうが、現況では難しい。撮影の際には、指導者の動きを追った。従って、児童・生徒役が実技を行なっているシーンでも、指導者が言葉を発していない箇所は編集の際にカットした。この編集に関しては、講義担当者である筆者の主観が入る。そのVTRを視聴した受講生のうち、68.9%は見たいシーンが「あった」と回答したが、「なかった」「なんとも言えない」と回答した者も26.2%いたことには留意しておきたい。VTRを見ることは意義があるとする者が97%で、VTRによる省察の必要性を認める者が96.9%(表3・4参照)もいる中で、見たいシーンが「あった」と回答しなかった者が26.2%いたということになる。他者の指導姿を見て声の大きさや話すスピード、説明・発問・指示の仕方、言葉の選択の仕方に注目した割合はそれぞれ91.8%、77%、98.4%、86.9%(表18・19・20・21参照)と、自身の指導姿のみならず他者の指導姿にも関心を示しつつも、受講者の26.2%はそれが「見たいシーン」に繋がっていないということになる。今回、この「見たいシーン」とは何かまでは掘り下げることはしなかったが、「自由記述欄」に「色々な角度からの映像があっても良いのではないか」という意見があった。多角的に撮影すれば見たいシーンが含まれる可能性は高くなる。一考の余地はありそうである。

VTRによる振り返りは、調査実施時点での指導役担当者全員が「とても意味がある」「意味がある」とした(表7参照)。また、96.8%が自身の指導する姿を見て得るものがあったとした(表8参照)。具体的に見ていくと、声の大きさに対しては76.7%、以下、話すスピードは83.3%、説明・発問・指示の仕方は93.3%、言葉の選択は86.7%が意識して視聴していたことになる(表13・14・15・16参照)。なお、「自由記述欄」に目を向けると、

- ・ビデオでの振り返りを行うことで、自分の反省点が明確に見えたのでやるべきだと思います。

- ・自分の指導の姿を客観的に見る機会がないので恥ずかしいところもありますが、気を付けるべきことや周りの人からの指摘が将来に活かせるので良いと思います。

などとあり、自らを客観的に見られることへの評価を窺うことができる。

ところで、前述のように模擬授業に対する振り返りは、当該の模擬授業終了直後にも実施している。この直後の振り返りを取り上げ、VTRによる省察よりも充実させるべきではないかとの問いに対する回答を見ると、「とてもそう思う」「思う」の肯定派(授業後の振り返りを充実させるべきであるとの立場)が55.7%となり、「あまり思わない」「全く思わない」の否定派(VTRによる省察に重きを置く立場)の42.6%を上回っていることがわかる。この設問はVTRによる振り返りを否定するものではないがVTRの省察同様、模擬授業終了後の振り返りも充実させる必要はあろう。

VTRを用いるべきか否かに関して問うた設問の結果を表しているのが表5・6である。昨年度の筆者のVTRを用いない模擬授業経験者に対して、今年度のVTRを用いた模擬授業との比較をさせた。ここで経緯を説明しておきたい。本年度講義当初、学生にはVTRを用いた省察するには模擬授業の回数が減ること、1回あたりの模擬授業の分担者が増えることなどの制限が掛かることを告げておいた。つまり、模擬授業が開始された後に制限が加わることを知った訳ではない。調査結果を見ると、昨年度との比較で「VTRが良い」とする者は78.3%、対して「どちらとも言えない」とする者は21.7%であった(表5参照)。上述のような制限が掛かったことに対しては、52.2%の者が「仕方がない」とする一方で、「制限は好ましくない」「どちらとも言えない」とする者も47.8%いた(表6参照)。映像による振り返りはしたいが、模擬授業を2人で行わなければならない、実際の模擬授業の回数が減ると経験できる種目も減る等の、制限との葛藤が推測される。つまり、客観的に省察できるVTRを用いた模擬授業が一概に良いとは言えない所以でもある。

最後に児童・生徒役を演じた者の意識に注目してみたい。半期間の講義の中で指導役を担当でき

るのは1回(分担すると指導役さえ担当できない場合もある)で、実質は児童・生徒役を演じて終わるというのが模擬授業講義の現実である。従って、この児童・生徒役で参加させる受講生の満足度を如何に高めるかということは、講義担当者にとっては大きな課題となる。筆者の場合、模擬授業終了後に評価カードを記入させ、また振り返りにおいて交わされた意見をメモさせ、後にまとめのノートに書かせている(補完の意味で、模擬授業の振り返りを教員の立場からまとめた「振り返り用の資料」を「manaba」で配信もしている)。さて、VTRによる省察において、「他者の模擬授業の視聴は自身の勉強になるか」との問いに対して、「とてもそう思う」が67.2%、「思う」が29.5%と、肯定的な態度が96.7%を占めた。しかし、これが「児童・生徒役を受講生が自身の姿を見て学ぶことがあったか」という質問になると、「とてもあった」が25.8%、「あった」が50.0%と肯定的な意見が75.8%であったのに対し、「あまりなかった」が22.7%、「全くなかった」が1.5%と、否定的な意見は合わせると24.2%になる(表9参照)。指導役でない場合に、受講生は何を見ているのかということにもなるが、児童・生徒役でも自身の姿に学びがあって欲しいところである。例えば、跳び箱運動での台上前転の姿、鉄棒運動での後方支持回転の出来栄え、そういったところが映り込んでいれば、視聴による学びはより促されるのではなからうか。指導法の修学目的でのVTR編集から逸脱しそうではあるが、受講生の興味関心を惹きつけるためにはそのような配慮も必要なのかもしれない。

8. まとめ

先行研究を俯瞰しても、VTRによる省察が受講生の授業実践の資質向上や授業力の向上に寄与することは明らかである。しかし、授業設計(15回の講義構成)という観点から、VTRによる省察をどのタイミングでどの程度入れるかを考えた時、講義の本質的な「質の維持」がなされているのは疑問の余地が残る。今回の調査でも、VTRによる振り返りを行う際の制限(模擬

授業の回数や担当者の増加など)に対する許容は高い数値を示さなかった。「教職課程コアカリキュラム」で示されている「授業改善の視点を身に付ける」方法としてVTRによる省察は有効とされようが、模擬授業を行う現場でそれをどのように行なっていくかは、今後も検討していくことが必要となろう。

ところで、本稿で敢えて触れなかったことの一つに、VTRの編集に関わる時間がある。模擬授業の当初は、2台のカメラで撮影した映像(1台は全体を、1台は指導担当者の動きを撮影)の合計40分を10分程度に編集していたが、この作業を筆者の様に2つの講義で行うとなると、相当の時間を費やすことになる。途中より、VTRを効率的に編集するためにカメラを1台にしたことで多少の余裕を持てるようにはなった。

この辺りの課題の解決の仕方として、喜多(2020)はグループ内で撮影担当者を決め、タブレットで撮影したものをそのまま必要とする者に送信してしまう方法を提示している。映像転送装置によるトラブルもあったようではあるが、講義担当者の負担はVTR編集に限ればほぼないということになる。また、落合(2017)は録画した映像をCDに記録し担当学生に渡すという方法を採っている。ここでは、担当学生は自身で視聴し「授業力自己診断シート」を記入するという作業を行わせている。この場合、撮影された映像は編集されていないようなので、編集の手間は省けると言えよう。

この2つの報告を参考に、VTRを用いた次のような模擬授業の実施も考えられる。則ち、指導場面のみの特化(授業開始時の挨拶や準備運動、健康観察と言った者を省略)した10分程度のMT(マイクロティーチング)にすると、編集の必要性も少なくなり、また模擬授業担当者も見たいところが直接視聴できる。模擬授業をグループで行うようにすることはビデオ撮影も学生に委ねることが可能となり、体育館やグラウンドの複数箇所でも模擬授業を同時に進めることも可能となる。これらの方法では、受講者数の多い講義においても模擬授業の回数が担保され、受講生全員が指導役の担当を経験できる可能性が出てくる。一方

で、当然のこととなるが、講義担当の教員の目が届く範囲が限定され、教員からの実質的指導がVTRに依存することとなり、模擬授業終了直後の指導が受けにくくなることも予想される。

VTRによる省察は、種々の課題を抱えつつも学生には好評であると言う結果を踏まえると、ここまで述べてきたような、模擬授業を行う講義が抱えている構造的な課題の解決もさることながら、VTRの視聴から何を気付かせるか、VTR視聴に講義担当者がどのように介入していくかと言うことにも関心を向けていく必要がある。これは、VTRによる省察によって「授業改善の視点を身に付けさせる」ための指導方法が、担当教員側に求められていると言うことでもある。これらは今後の課題として挙げておきたい。

参考文献

- ・ 秋吉博之 (2017) 教員養成課程における理科指導力の育成—模擬授業の取組と課題—, 日本科学教育学会研究会研究報告, 31 (7), 25-30.
- ・ 内田雄三 (2013) 教育実習事前指導における指導内容の検討: 保健体育科模擬授業に関する学生の記述内容の分析を通して, 白鷗大学教育学部論集, 7 (2), 391-405.
- ・ 落合賀津子 (2017) 模擬授業のビデオ録画を用いた自己評価の取り組み—授業力自己診断シートを活用して—, 北里大学教養課程センター教育研究, 3, 115-126.
- ・ 上條真紀夫 (2018) 教師教育におけるMT授業の効果—初等体育科教育法におけるMT授業を通じた大学生の省察の変容を通して—, 淑徳大学研究紀要, 52, 121-145.
- ・ 喜多容子 (2020) 授業省察におけるICTの効果的な活用方法についての—考察—英語科授業実践における—取組—, 鳴門教育大学情報教育ジャーナル, 17, 54-57.
- ・ 木原成一郎, 他 (2008) 教員養成段階で行う体育の模擬授業の効果に関する事例研究: テスト映像を視聴した学生が気づいた体育授業の要素, 広島大学大学院教育研究科紀要, 第一部学習開発関連領域, 57, 69-76.
- ・ 木原成一郎, 他 (2007) 教員養成段階の体育科目における模擬授業の意義に関する事例研究, 広島大学大学院教育研究科紀要, 第一部学習開発関連領域, 56, 85-91.
- ・ 教職課程コアカリキュラムの在り方に関する検討会 (2017) 教職課程コアカリキュラム, 文部科学省初等中等教育局教職員課教員免許企画室.
- ・ 小松崎敏 (2010) 模擬授業の意義と効果的な進め方, 新版体育科教育学入門 高橋健夫, 編集, 大修館書店, 263-271.
- ・ 高橋純, 他 (2018) 教員養成段階における汎用のSNSを活用した模擬授業演習の試み, 日本教育工学会論文誌, 42, 97-100.
- ・ 徳永隆治 (2009) 模擬授業による体育授業づくりの意識形成に関する事例的研究, 安田女子大学紀要, 37, 197-207.
- ・ 長嶺健, 他 (2019) 大学における体育の模擬授業の在り方に関する研究—受講生の相互評価及びリフレクションシートへの記述分析を通して—, 九州共立産業大学紀要, 9 (2), 9-19.
- ・ 長谷川悦示 (2003) 筑波大学の体育授業実習例, 高橋健夫編著, 体育授業を観察評価する—授業改善のためのオーセンティック・アセスメント—, 明和出版, 145-151.
- ・ 深見英一郎 (2005) 天理大学における教師教育プログラムの検討—体育の模擬授業実践及び授業観察の分析を通して—, 天理大学学报 (体育編), 56 (3), 23-34.
- ・ 福ヶ迫善彦, 他 (2007) 授業省察力を育成する模擬授業の効果に関する方法論的検討, 愛知教育大学保健体育講座研究紀要, 32, 33-42.
- ・ 藤田育郎, 他 (2011) 教員養成課程の体育科模擬授業における教師役経験の意義についての検討—授業の「省察」に着目して—, 体育科教育学研究, 27 (1), 19-30.
- ・ 藤田育郎, 他 (2009) 体育科模擬授業における学習成果の検討, 国士舘大学体育研究所報, 27, 79-86.
- ・ 松野浩平, 他 (2011) 教員養成課程のマイクロティーチングにおけるLMSを用いたコメント活動の検討—理科教育法を対象にして—, 日本教育工学会論文誌, 35 (1), 83-93.

- ・松本奈緒 (2015) 複数回の指導経験から反省的実践力を保障する体育教師養成カリキュラムの検討—マイクロティーチングと模擬授業の実施・省察を通して—, 秋田大学教育文化学部研究紀要教育科学部門, 70, 33-43.
- ・宮尾夏姫, 他 (2014) 体育科模擬授業における学習成果—授業・授業づくりの要点の理解と学習を促す授業体験の事例的検討—, びわこ成蹊スポーツ大学研究紀要, 12, 93-104.
- ・村井潤, 他 (2009) 模擬授業を複数回実施することの効果に関する事例的検討—ソフトバレーボールを教材として—, 学校教育実践学研究, 15, 39-48.
- ・山崎将幸 (2018) リフレクションシートを用いることによる教員志望学生の資質向上可能性について—保健体育科教育法の模擬授業実践から—, 東亜大学紀要, 26, 133-138.

Acceptance of Trial Teaching Sessions Using VTR-based Reflection in the Instruction of Teaching Methods for Physical Education

KATO Junichi

Abstract : The author recorded students' trial teaching sessions in a lecture on physical education using a video camera and then designed classes wherein students were provided time to watch the videos and reflect on their teaching. This method is called reflection on one's own trial teaching using the video tape recorder (VTR). Previous research on the effects of this method has shown that when classes are taught using this method, a variety of issues are likely to arise, such as an increase in the number of teachers for each trial teaching session and a decrease in the number of trial teaching sessions conducted, which should be solved. In this study, classes were designed in consideration of these issues, and a questionnaire on the format of the lecture in question was conducted as a part of the formative assessment for the class to inform subsequent class management. This study examines the results of that questionnaire. The results indicated that although students were positive in the VTR-based reflections, they also voiced some negative opinions regarding issues, such as those mentioned previously, which arise when this technique is used.

Keywords : VTR, trial teaching, reflection, class design